



西田幾多郎と短歌

〈企画展〉
令和5年(2023年) 令和6年(2024年)
10/3(火)~3/24(日)

私は短歌によっては極めて内面的なるものが言い表されると思う。

西田幾多郎「短歌について」

哲学者・西田幾多郎は、生涯で約二百首の短歌を詠んでいます。次々と起こる家庭内の苦難に直面しながら、幾多郎は自らの胸中を表す手段として短歌を用いました。それらの中からは、長男謙の病死や、妻と娘が次々に病んでいく家庭内の様子など、当時の幾多郎をとりまく状況が生々しいほどにうかがえます。

また万葉集に親しんでいた幾多郎は、島木赤彦や斎藤茂吉などアララギ派の歌人たちと交流がありました。新収蔵した資料の中から、彼等が幾多郎へ宛てた書簡を初公開します。また、幾多郎没後に筐底から発見された直筆ノート「自撰詩歌集」を初公開し、あわせて幾多郎直筆の書で自作の短歌を紹介します。哲学者の歌の世界をご覧ください。

た、春の日こそ親しむに
免れなく思ひし事の跡たえてたゞ春の日ぞ親しまれける

大正十二年三月三日作歌「免(と)にかくに思ひし事の跡たえてたゞ春の日ぞ親しまれける」

大正十二年二月二十日作歌
「吾こゝろ深き底あり喜も憂の波もとゞかじと思ふ」



西田幾多郎直筆ノート「自撰詩歌集」

明治四十三年作歌
「我死なば故郷の山に埋れて昔語りし友を夢みむ」

大正十三年八月十日作歌
「真夏日をひるはひねもす犬ころと庭のかきねに戯れにけり」



子犬を抱く幾多郎と娘たち



西田幾多郎直筆原稿『赤彦全集』推薦の辞」

『アララギ 島木赤彦追悼号』